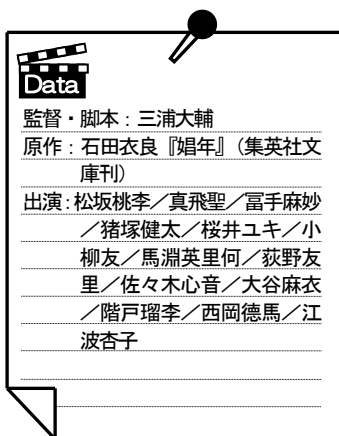




■■ショートコメント■■

◆三浦大輔監督の『愛の渦』(13 年)、『シネマ 32』未掲載)はかなりエロティックかつセンセーショナルな映画だったが、同監督が石田衣良の原作『娼年』の舞台化に続いて、さらに映画化した本作もかなりエロティックで刺激的。キネマ旬報 4 月下旬号では冒頭にその特集が組まれ「松坂桃李、聖域を超える」との見出しでその全貌が語られている。

舞台が「R15 指定」なら、映画も「R18+ 指定」。冒頭から 20 才の大学生森中領に扮した松坂桃李がスッ裸になってのセックスシーンが展開されるが、これこそが「セックスが会話になる」をうたい文句とした本作の特徴。意外にも客席は女性陣が 8 割以上。これはほとんどみんな松坂桃李目当て・・・？

◆「娼婦」は昔からある立派な職業(?)だが、何でもありの今の時代、「娼夫」だって当然 OK。もっとも、娼夫がれっきとした男の職業なのか、それともホストクラブのホストの延長に過ぎないのかはイマイチ本作を観てもはっきりしないが、今風の問題提起であることはよくわかる。

それを男性作家の石田衣良が『娼年』で表現したことにも驚きだが、本作では娼夫となる男の心理のみならず、その客となるさまざまな階層、年齢、種類の女たちの性的欲望とその心理が分析され描かれていることにビックリ。

◆もっとも、エイズの女、口のきけない女という 2 人の主人公をはじめ、○○の女、△△の女、××の女等、ある意味で変態的な性的欲望を見せつける女たちが次々と登場し、リョウ君は 1 人 1 人そのお相手をしなければならぬのだから娼夫も大変。ちなみに、70 歳のばあさんにも性欲はあるらしいが、女渡世人や女バクチ師として一世を風靡した女

優・江波杏子がそんな役をやっていると、痛々しく思えたのは私だけ・・・？また、これだけの仕事をする娼夫の時給1万円が高いのか安いのかは微妙なところだ。

◆一流大学の経済学部に入ったものの、勉強にもバイトにも女にも興味を持てず、ヒマを持て余していた領が、会員制ボーイズクラブ「Le Club Passion」のママである御堂静香（真飛聖）から見い出され、娼夫として成長していくというのが本作のメインストーリー。それは、ある意味で『スパイゲーム』（01年）（『シネマ1』23頁参照）におけるロバート・レッドフォードとブラッド・ピットの関係と同じだが、その社会的役割の大きさは全く違っている。

同作のCIAのスパイとしてさまざまな危険な任務に従事しながら成長していくストーリーには一種の爽快感があったが、さて本作は・・・？ちなみにヘンリー・フィールドイングの小説を映画にした『トム・ジョーンズの華麗な冒険』（63年）は主人公トムの女遍歴の物語だったが、さて人間としての成長は、トム・ジョーンズとリョウ君のどちらが上・・・？

◆領の性的魅力には全然興味がないように思えた同級生の女の子、白崎恵（桜井ユキ）が1ヶ月分のバイト代に相当する大枚をはたいて「娼夫」の領を買うラスト近くの物語にはかなり違和感があるが、全体としての問題提起はなかなかのもの。そして、何より松坂桃李の文字通りスッ裸になっての熱演の連続には頭が下がる。AV女優は大変だが、実はそれ以上に大変なのはそのお相手をするAV男優だ。本作のような文学作品、芸術作品（？）を見ているとそれがより一層わかってくる。

松坂桃李は本作の直後には役所浩司と組んだ『孤狼の血』（18年）の公開が控えているので、そこでの男らしいヤクザの演技（？）と対比しながら、本作で彼の20代最後となる裸の熱演をしっかり確認したい。

2018（平成30）年4月14日記